「2021 年度 第 2 回 全国 U15 バスケットボール選手権大会を終えて」

帯広市立帯広第一中学校
女子バスケットボール部
監 督　　福 岡　洋 介

素晴らしい選手達との出会いと選手たちの日々の努力、素晴らしい先輩の監督・コーチの方々からのご支援、保護者の皆様のお力添え、帯広・十勝・北海道での各大会に向けて、そして、大会を終えてからの猛省の日々の積み重ねにより、私にとって初めての全国大会へ出場することができました。出場までの 1 年間の取組を中心に振り返りながら、報告させていただきます。

私がバスケットボールの指導を始めて 2 年目の平成 22 年に帯広第一中学校の女子チームの監督として広島全中に出場された髙畠恵樹先生が、技術伝達講習会を帯広第一中学校の新体育館で行いました。とても素晴らしい体育館、そこでプレーする選手達、熱く指導される髙畠先生、その全てが私の目にはとても輝いて映り、私もいつの日か、「夢の舞台全中」へ出場することを夢見て指導をするようになりました。

また、安達一男先生は、十勝の人達やバスケット界の方とのつながりのない私と様々な方が出会う機会も与えてくださいました。早坂昭先生(札幌清田高校)、山田秀剛先生(札幌平岸中学校)、田島範人先生(駒大苫小牧高校)、秀島起也校長先生(札幌市立中の島中学校)、及川功次郎先生(元宮城県迫桜高校校長)、内海知秀先生(日立ハイテク クーガーズ)をはじめ、多くの指導者と出会わせてくれました。平成 31 年度から帯広第一中学校に勤務することとなり、安達先生と職員室の席と教室を並べながら、教員として、人として、本当に多くのことを教えていただいています。そして、髙畠先生の講習会の会場だった一中の体育館でバスケットボールの指導をさせてもらっていることに、不思議な縁を勝手に感じています。

令和 2 年度から女子顧問となった春、早坂先生が帯広に来られた日の朝、ホテルのロビーでたくさんの話をいただきました。その時に教わったことは今でも大切な宝物です。教わったことをもとに指導計画をたて、チームの目標を「全国出場」と決め、「どのチームよりも走って 28m のバスケットをする」、「1 対 1 で負けない」を目標に、練習を始めました。帯広市内秋季大会、目標としてきた髙畠先生との初対戦が決勝戦となりました。髙畠先生率いる緑園中学校になんとか勝利し、優勝することができましたが、プレッシャーに飲み込まれる試合展開で、勝った心地はしませんでした。続く U15 選手権十勝予選では，決勝戦で緑園中学校に敗れ、準優勝という結果でした。この大会後に、チームは大きく傾きました。原因は、私の明らかな指導力不足。次の大会に向けて、チームとしてまとめることができませんでした。結果、全十勝秋季大会の準決勝で緑園中学校に敗れ、3 位決定戦で何とか勝利し、北大会への出場権は確保しましたが、試合後、選手との距離はさらに遠くなり、保護者の方々に会わせる顔もありませんでした。

そんな中、「あの練習では負けると気が付かなかったのか」と声をかけてくれたのは、安達先生でした。負けるとはどういうことなのか、ストレートな言葉をたくさんいただきました。言い訳はせず、自分が受け止めて成長するしかない、これは勝ち負けの世界なのだと再確認し、髙畠先生との「勝負」を意識するようになりました。今まで指導してきたメニューを洗い出しながら、恩塚亨先生(東京医療保険大学)の DVD を参考にディフェンスについて学び、第 1 回 Jr.WinterCup の試合をネットで観て、全国に出場するチームのレベルやプレーとはどのようなものなのかなど、勉強の日々を経て 3 月の北大会を迎えました。ベンチに

入っていただいた安達先生から諭されていた通り、「負ければ HC をクビになってもしかたがない」と思いながら全力で大会に臨みましたが、試合の度に猛省しながら最終日まで進みました。決勝は 1 試合目に戦った滝川明苑中学校との対戦でしたが、最後まで選手が粘って勝利を収め、北大会を優勝という結果で終えることができました。私自身は監督として、「安達先生に優勝させてもらった」という意識が強かったですが、表彰式での選手たちの本当にうれしそうな笑顔が目に焼き付いています。

大会後に年度が変わり、髙畠先生が退職を迎えられる年度となりました。AC だった福永真里先生が緑園中に移動になってしまいましたが、芽室中から伊藤宙伸先生が一中に来ていただき、新体制でのスタートとなりました。GW の遠征を中止せざるを得なくなるなど、コロナウィルス感染拡大の煽りを受けながらも、最後の夏に向けて日程は進みました。全ての大会の決勝戦は髙畠先生率いる緑園中学校との対決で、帯広市春季大会で勝利、帯広市夏季大会で敗北、全十勝夏季大会では勝利し、全道大会へ駒を進めました。試合の度に、次の大会に向けて反省や相談をさせていただいた早坂先生がいつもアドバイスしてくださいました。全道大会では、北大会で勝った釧路の富原中学校に負けてしまい、ベスト 8 という結果で全中への夢は途絶えてしまいました。大変申し訳なく思いましたが、下を向いている暇はなく、U15 選手権の十勝予選がすぐ行われ、迎えた十勝予選決勝、対戦相手は緑園中学校となりました。髙畠先生との最後の対戦となる決勝の舞台、選手と共に闘いました。結果は、69－63 で勝利し、試合後に髙畠先生と握手をしながら、「髙畠先生の想いも背負っていかなければならない。」と、強く感じました。

U15 選手権全道予選では、全道の反省を生かし、選手の起用やアップのメニューについて考えていきました。プレーに関しては、伊藤先生と相談しながら、オフェンスの 3 人目のタイミングを合わせる練習、スクリーンプレーに対するディフェンスの練習、伊藤先生が芽室中学校で使っていたエンドプレーを加え、大会に臨みました。大会では初戦を勝利し、準決勝で札幌清田中学校と戦うことが決まりました。準決勝の試合当日、気持ちが前面に出た選手達は躍動し、同点で 4 ピリオドを終え、延長戦に入りました。延長でも自チームの得点からゲームが始まる展開となりましたが、リードを保ち切れず、再延長となりました。生徒はとても落ち着いていて、再延長の最後、伊藤先生が芽室で使っていたエンドプレーからキャプテンの高井ひよりの 3P が見事に決まり、その後のディフェンスで攻撃をしのいで試合が終了。58－55 で勝利しました。その次の決勝の相手は、全道大会で敗れた釧路の富原中学校。あとは夏の悔しさをぶつけるだけでした。決勝戦のゲーム序盤に相手エースの怪我もありましたが、準決勝で勝った勢いのまま 55－46 で勝利をおさめ、全国大会への切符を手にしました。

帯広市内秋季大会、全十勝秋季大会、翔陽中学校と合同で挑んだ 1 年生大会、網走で行われた北大会と 1 ・ 2 年生主体の活動に取り組みながら、全国大会へ向けて準備を進めました。大会参加に向けての 2 回のリモート会議、予算付け、保護者や旅行業者との打ち合わせを行いながら、練習も続けましたが、 1 ・ 2 年生の新チームとの兼ね合いや 3 年生の練習時間の確保、コンディションの高め方など、何をするにも初めてのことばかりで苦労の連続でした。伊藤先生とミーティングを重ねながら意思の疎通を密にし、様々な課題も共に乗り越えていきました。対戦相手も決まった頃、髙畠先生のもとを訪ね、オフェンスやディフェンス、全国大会の戦い方、予算や日程などの取組についてなど、本当に細かく、幅広く教えていただき、少しでもチームに還元できればと思いながら

指導しました。全国大会に向けて準備したことは、これまで大切にしてきたことの確認と徹底で、ディフェンスリバウンドからオフェンスリバウンドまでの流れをつくること、判断スピードを上げること、1 対 1 の強化、ハーフコートオフェンスの整理、チームディフェンスの変化に重きをおいて指導しました。

出発となった 1 月 3 日、帯広空港を飛び立った瞬間に、やっとこの日が来たと準備期間の長さを実感しました。明けた試合当日、会場まで電車で移動し、各種書類を提出して大会会場に入りました。

1 日目はサブコートでの鳥取県代表の湯梨浜中学校との試合で、自チームの選手がアップから浮足立っている様子もありましたが、ゲームは落ち着いてスタートしました。徐々に自分たちの持ち味を出し、生き生きとプレーすることができました。しかし、2 ピリオドの最後に 2 年生エースの岩崎羽那が怪我をしてしまいました。そのことで、落ち着くまでは 3 ピリオドは苦しい展開となりましたが、最終的には 68－59 で勝ち切ることができました。岩崎の怪我は骨折で、明日の試合には出ることができないことがわかりました。3 年生と共に一緒に闘い続けてきたこともあり、北大会やそれまでの疲労の蓄積もあったのではないかという思いと、メインコートに立たせることができなかった申し訳なさが、移動用の車いすを借りに行く三鷹までの道中でこみあげてきました。その夜のミーティングで、怪我をした選手の思いをスタメンになる 2 年生二人が受け止め、全員で闘い抜くことを決意しました。

2 回戦は沖縄代表のクラブチーム Swish との対戦となりました。相手の 5 番 178cm の角田絆奈選手をはじめ、体の大きさとプレーの強さ、身体能力の高さ対して戸惑ったゲームの入りとなってしまい、1 ピリオドで 13 点ビハインドとなる展開となってしまいました。けれども、相手の当たりにも徐々に慣れ、選手が自分たちの持ち味を出し始め、8 点差まで追いつく場面もありました。ですが、オフェンスもディフェンスも最後のリバウンドで、高さと強さに勝てずに取られてしまう場面が目立ち、途中からオールコートであたったものの、55―76 で負けてしまいました。選手たちは自分たちのもっている力以上のものを出してくれたと思います。とても素晴らしいプレーを全国の舞台でもたくさん見せてくれました。

全国大会に出場して思うことはたくさんありますが、沖縄のようなチームに勝つためには、「自分よりも大きな相手を倒すバスケットをするという意識をもつこと」、「走る・戻るなどの当たり前のことを当たり前にすること」が重要で、体幹の強さとポンプフェイクを身に付けることの必要性を感じました。

このように長々と全国大会出場までに起きたことを中心に書かせていただきましたが、振り返ってみると敗北してしまった試合も含めて、無駄なことは何ひとつなかったと思っています。最後になりましたが、これまでチームの成長を支えてくださったすべての方々にこの場を借りて、感謝とお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。また、1 年間チームの成長に直結する真剣勝負をしていただいた髙畠恵樹先生、常に私を指導し、今後の人生に関わる人と出会わせてくれた安達一男先生、数々の節目にバスケットボールの大切なことを教授していただいた早坂昭先生、ありがとうございました。ここには書ききれませんが、3 名の先生方の他にも関わっていただいた先生方、帯広バスケットボール協会の皆さん、これまで出会っていただいた全ての方々に感謝を伝えたいです。本当にありがとうございました。これからも、皆さんに応援してもらえるチームをつくれるよう努力を続けていきたいと思います。今回の全国出場が、子どもたちの財産になることを信じ、全国 U15 選手権大会の報告と致します。